慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 表紙 目次 |
| Sub Title | |
| Author | |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1958 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.12 (1958. 12) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581201--001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 三田學會雜誌

昭和三十三年十二月一日　発行（毎月一日発行）
昭和二十六年二月十三日　国鉄特別扱承認雑誌第一、九〇三号
昭和二十五年十月二十四日　第三種郵便物認可

慶應義塾経済学会

十二月号

論説

古ハワイにおける漁業……野村兼太郎（一）
「科学的経営」の機構と原理……青沼吉松（一四）
寡占と価格決定……原豊（三〇）

資料

De "ceteris liberis hominibus quos vocant bharigildi"……宇尾野久（五一）
ジョン・フランシス・ブレーの「ユートピアからの航海」について……飯田鼎（六五）

書評及び紹介
経済学関係文献目録
昭和三十三年下半期総目次

第五十一巻　第十二号

昭和二十五年十月二十四日　第三種郵便物認可
昭和二十六年二月十三日　国鉄特別扱承認雑誌第一、九〇三号
昭和三十三年十一月一日　発行（毎月一日発行）

三田学会雑誌

昭和三十三年十一月号　定価　金九〇円（八送料）

# MITA GAKKAI ZASSHI

(Mita Journal of Economics)

Vol. 51, No. 11　November, 1958

## CONTENTS

The Mechanism of Administration and Human Relations ..... *Y. Aonuma* (Page 1)

The Outset of the Theory of Legal Minimum Wage in the History of Political Economy ... *T. Kurokawa* (31)

Vaine pâture ..... *K. Watanabe* (45)

Selected Hypothesis and Correlation Coefficient ..... *T. Sato* (61)

**Reviews and Notes**

Published for
**KEIO-GIJUKU KEIZAI GAKKAI**
(The Keio Economic Society)
Editorial communications to be sent to the Editor, Keio-Gijuku Keizai Gakkai, Keio-Gijuku University, Mita, Minato-ku, Tokyo, Japan.
Price 90 yen

書評及び紹介

K・E・ボールディング『経済政策の原理』……加藤　寛（八一）
L・W・アイルズ著
本城俊明訳『団体保険の研究』……庭田範秋（八五）

# 古ハワイにおける漁業

野村兼太郎

## 一

ある人間の群が火山島に漂流又は到著して、そこに定住すると決心した時、主たる食料を海産物に求めることは、恐らく最も自然であったろう。縄文式土器の使用者が貝塚を形成したことも、活火山が至るところにあり、海岸線近くまで山岳がはびこっている日本のような場合、最も手近な、かつ容易に採取し得る海辺に食料を求めた結果であろう。従って漁撈ということは、こうした火山島に定住した民族にとって、恐らく最初の生活のための営みであったと思われる。その場合、その後農耕が発達したとしても、その制度、慣習に、その以前の漁撈的特徴が全然なかったとは考えられない。日本の場合は所謂大陸島であり、絶えず大陸からの影響をうけていたらしく、農耕の発達も多分に外部からの刺戟に基づくものであったから、純粋に両者の関係をみることが出来ない。

これに反してハワイの場合は、所謂大洋島であり、海上に孤立していたから、漁撈と農耕との関係を知る上には都合がよい。ただ古代ハワイ人はハワイ諸島へ渡来する以前に、農耕的知識をもっていたようである（拙稿「ポリネシア人のハワイ移住について」三田学会雑誌第五十巻十・十一合併号参照）。しかし仮令農耕に関する知識があり、又種子等を持参していたとしても、ハワイ諸島の如き大洋島においては、直ちに労多き農耕に従事することは不可能であったろう。周知の如く、ハワイ諸島は直接海底から湧出した二つの火山系からなる。従って多くの海岸は絶壁をなし、舟著場さえ稀である。傾斜地に耕地を見出すことも容易でなかったろうと思われる。勿論間もなく人口が増加し、労力も増せば、直ちに農耕に従事し始めたろうが、移住当初においては、漁撈に依る収獲と豊富な果実類に依って食生活を営んだものであろう。

第十一世紀に始めて移住して来たポリネシア人は元来海上生活に馴れていたから、漁撈に関しても相当の知識があったものと考えられる。その点においては、原始民の最初の形態を考察するのには不

### 古ハワイにおける漁業